



終末を選ぼうとしている?! 私たち

このところ哲学者でボン大学教授のマルクス・ガブリエルがマスコミの注目を集めている。筆者は昨年秋、ある会合で『未来への大分岐』（集英社新書）を勧められて彼を知った。「正しい概念は、不平等、人種主義、気候変動など、事実関係についての問題を修正するのに必要なもの」であり、哲学者は正しい概念を提供する倫理的責任があるとして「新実在論」を提唱している▼中身はいささか難解であり本欄の限られたスペースでの紹介はまして困難だが、新実在論を、「ひとつめは、私たちは事物を事物そのものがあるままに知ることができる、ということ。ふたつめは、私たちが知ることのできる多くの実在的なモノがすべて単一の領域（世界）に属しているわけではない」という二つのテーゼとして定義されるとする▼現状、わたしたちは気候変動やテロなどの脅威に直面しており、

「生死の選択という分岐点」に立たされている。まさに「人類は、今、胸元に拳銃をつきつけられているような状態だ。『撃たないでくれ』と叫び、最悪の事態を避けるために、行動する選択肢もある。それなのに、『どうぞ撃ってください』とっている。未来ではなく、終末を選ぼうとしているのは、私たち自身なんだ」との認識は卓見だ▼いくつもの論点を提示するが、AI等の情報テクノロジーについて「非人間化を推進する助けになっている」とし、「もし野放しにしていれば、最終的には、人間がみずから生み出したものに従属した全面的な監視社会に住むことになる」と警告する。「わたしたちがコンピュータに服従させられたのではない。私たちが自分たち自身をアルゴリズムに服従させている」とする▼それにしてもあのNHKが彼による『欲望の資本主義』をシリーズで放映するとは、不思議でもある。

(土着菌)